

編集後記

▼発刊が大幅に遅れました。おわびします。

▼特集「ムカツキ」「キレる」子どもたちにはたくさんのかたがたに発言していただきました。新潟の教育の現実になかでもなにも事態の深刻さとそれを打開する道を必死にもとめておられます。

▼冒頭の高校生は電車のなかで小学生が高校格差について語り合っているのを聞いて心を痛めています。かれの「本当の勉強とは何か」の問いに大人が本気に答える時です。

▼つづく教師の発言は新潟の教師たちが、今なすべきことに鋭くせまります。

「荒れ」に直面しながらも、誠心誠意子どもたちや親とむきあい、「開かれた学級・学校づくり」をめざす木村氏の実践、子どもは本質的に変わっていない、大人の「育ちそびれ」「育ち方の責任」こそ深く掘り下げて検討すべきではと学校の事態のなから提起する西氏の実践、(三輪論文「教師はなぜキレるか」と合わせ読むとうなずけます。)

管理主義に陥りがちな学校を子どもに優しい学校運営ができるように実にこまやかな手をうって一歩でも二歩でもあゆみをすすめる高橋氏の実践、そして決意の背景に事態の本質を深くみつめる厳しい彼の目があります。

▼県の教育委員会から資料とともにコメントをいただきました。この問題への教育行政の具体的な取組みがわかります。今年もさらにいいいに県民のこえを聞いていくという「のびのびにいがたっ子フォーラム」開催のあと次の施策が期待されます。

▼ジャーナリストテックに取り沙汰されがちなこの問題に研究者たちが事態の本質に深く多角的にせまり、鋭い問題提起をしています。

阿部氏はナイフなどの持ち物検査のような管理主義教育の推進ではせつかく築き上げ掛けた親と教師の新たな関係づくりが押し潰される危険性があると指摘し、学校があたらしい文化や社会をつくりだす共同体へ転換する糸口を提示しました。

▼ロサンゼルスから帰国した八木氏のアメリカン社会と子どもたちのスケッチは衝動的でした。またロサンゼルス教育委員会の文書で統社会のなかの「子どもの責任」の重さを

知らされ、同時に市民的権利が子どもたちのなかにも買かれていることに啓発されました。人ごとのように「心の教育」を親に説く日本の教育行政の水準とは違います。

▼丸山・小島氏の論考は子どもにもおとなたちにもやさしい自然・地域の環境づくりにとりくむ地道な努力がたわわとってきます。斉藤氏の論文は子どもたちの地域での生活を支える親たち、暮しやすくなるために、地域経済環境をどう築きなおしていったら良いかということへの視点をしめています。

にいがたの教育情報 No.54

1998年7月10日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
〒951 新潟市東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025) 228-2924
振替口座・00640-0-12332
印刷所・中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。